

学校教育課だより

かけはし



学校教育課だより
「かけはし」
【第 4 号】
平成 29 年
8 月 1 日発行
御殿場市教育委員会
学校教育課

夏への期待

教育監兼学校教育課長兼教育指導センター所長

勝亦 重夫

かなり前のことになりましたが、精神科医・作家であった故なだいなだ先生と、ある会合で同席させていただいたことがあります。大変柔和で幅広い視点から発言される方でした。

なだ先生の著作は数多くありますが「こころの七くせ」という本に次の一節があります。「世の中には変わったものを見ると、ケシカランと反射してしまおうと」「面白い」と反応する人という。「面白い」派は、好奇心でものをみる人だ。つまり大脳を働かせている。ケシカランは恐怖心でも

のを見る人たちだ。ケシカランと存在そのものを抹殺しようとする。つまり脳幹反射で対応する。」

私自身、経験が浅かった頃は、子どもの服装や頭髪での第一印象でその子どもを判断してしまいう傾向がありました。太い学生服スポンを履いてきた子どもを見れば、不良指導と反射的に思いました。「どうしたんだらうか？何かあるのかな？」などと考えを巡らせる余裕はありませんでした。問題行動は、その子どもの家庭的な問題や友達との人間関係といった様々なことが引き

金となり、表面に表われてくるものです。当然、行動自体への指導は行いますが、その背景について十分に情報を集め、何とか解決できないかと、子どもに寄り添った話をする

ことが必要となります。自分を分かってくれようとしてくれる、何とかしようとして助けをしてくれる大人の存在は、子どもにとって大きなものです。

なだ先生は精神科医としての立場からこう指摘しています。「生理学的に言えば、反応の方が反射よりのろい。反応は大脳までいって戻ってくる。つまり考えての対応だ。反射は刺激が意識までいかない。反射は脊髄で返ってくるから早いのだ。だが、早ければいいというものではない。」
早さが必要なきはもちろんです。しかし、教育で

大切となる「子どもの心の在り様」をつかむためには、一呼吸おいて反応することも大切になります。

子どもを理解するために何が重要かといえば、私たち教職員が幅の広い視野を持つことだったり、豊かな心を持つことだったりすることであると思います。このことが、子どもに対して余裕を持つて対応ができ、一人一人の子どものたちの思いや願いを感じ取った適切な指導をすることにつながるはずです。

夏季休業に入り、前半は研修会等があり、あまり余裕が無いと思いますが、後半になれば時間ができます。夏の限られた時間ですが、教育者としての幅を先生方が広げていただけることを願っています。

学校は楽しいよ

教育指導センター
指導員 芹澤 ゆき子

学校訪問を瀬戸指導員ときさせていただき、子どもたちの頑張りや、先生方の温かい対

応を見ることができました。子どもたちが、意欲的に頑張れる要因を、幼児教育の視点から考えてみました。

まず、一つ目は、「私の事を理解してくれる、先生や友達がいる」という事です。
小学校という大きな集団に入り、誰もが、少なからず、不安を持っていると思います。特に困り感を感じている子どもは、どちらかというと、行動がゆっくりであったり、自分から話すことが苦手であったりします。

例えば、忘れ物をした時、「どうして忘れたの。」「なぜ言わなかった。」と、問いただしたとしたら、言えなかったその子の内心はどうでしょう。「困った時は、先生に話すこと。」「は、知っているはずですが。でも、言えない子どももいます。」

ある学校で、とても温かい場面を見ました。



赤青鉛筆を忘れた子ども用に、先生があらかじめ数本用意していて、さっと貸して、「次は、持ってこられるといいな。」とそつと言いました。その子どもは、ほっとした表情で、学習を続けましたが、その姿は、前より意欲的に見えました。きつとこの子は、困っている友達を見たら、「どうしたの。」と、声をかける事出来る子になるでしょう。子どもたちは、自然と先生をモデリングしています。忘れ物に限らず、一年生は、自分だけではどうにもならない事があります。そこを、わかってあげたいです。

二つ目は、「私それ知っている。」「できたよ。」という、自信を失わせない事です。

期待感を持って入学してきた子どもたちですが、学習をしていくうちに、個人差が出てきます。「わからない。」「できない。」「事が増えていくと、元気がなくなっていくます。

学校にも慣れ、自分を出し始める、六月のある日こんな場面に出会いました。

子どもが、違った答えを出しても否定しないで「友達にわかるような声の大きさだっ



たね。友達の意見も聞いてみようね。」と、少しでも、その子の良いところを認めていく。答えが違っていた子どもは、嬉しそうに座ると、友達の意見をしっかりと聞き、自分のノートを直していました。その学級は、友達の話真剣に聞き、「そうだね。」「それいいね。」などの声が、自然と出ています。学級づくりがうまくいっているのでしょう。訪問の際には、校長先生を始め、教職員の方々のお心遣いありがとうございました。夏休み明けに、身も心も一回り成長した、子どもたちと先生方に会えるのを楽しみにしています。

新規不登校児童生徒数の抑制を 目指して

指導主事

石田 善正

近年、全国における不登校児童生徒数が増加傾向にあり、静岡県や御殿場市も同様の傾向があります。不登校児童生徒数の増加は、現在の生徒指導上の諸問題の中で、最重要課題となっております。

本年度、御殿場市は、国の指定を受け、国立教育政策研究所（教育政策に係る調査研究を行うために、文部科学省に置かれている研究所）の「魅力ある学校づくり調査研究事業」に取り組んでいます。不登校対応は、各校において、全ての児童生徒を対象とした「未然防止」、不登校の兆しが見えた児童生徒を対象とした「初期対応」、不登校状態にある児童生徒を対象とした「自立支援」の取組が行われてきました。この調査研究事業は、不登校の「未然防止」に焦点を当てています。不登校を未然に防止し、不登校対応の最

終的な目標である児童生徒の社会的な自立を促すため、誰にも居場所がある学級・学年集団づくり「主体的に参加できる授業づくり」「絆が深まる自治的な児童会・生徒会活動の充実」など、子どもたちにとって魅力ある学校づくりを推進するということです。

これまで、不登校対応といえば、不登校状態にある児童生徒への自立支援が中心でした。しかし、近年、新規不登校児童生徒数が継続不登校児童生徒数を上回る状態が続いており、自立支援だけでは不登校対応は十分ではないという考え方に変わってきています。不登校児童生徒の自立支援を進めながらも、新たな不登校児童生徒を生まないために、出席している全ての児童生徒に目を向ける必要があります。

今年度は、西中学校、玉穂小学校、印野小学校をモデル校として、西中学校区内の各園とも連携しながら取り組んでいます。学校に来ている全ての子どもたちにとって、学校が意味ある大切な場となるために、教職員が自分たちの進めている取組について、当

り前のように頑張っている子どもたちの心に届いているのかを、児童生徒意識調査結果を基に定期的に点検します。そして、取組を必要に応じて改善して実践します。このPDC Aサイクルを繰り返し進めます。現在、この三つの小中学校では、一点突破の目標として、「授業に主体的に取り組んでいる」と回答する児童生徒を増やすための取組に力を入れています。その結果、児童生徒意識調査結果の数値が少しずつ増加し、新規不登校児童生徒数が昨年度と比較して減少しているなど成果が表れてきています。

学校は「訓練の場」とも言われます。子どもたちにとって、社会制度としての学校は決して楽しいだけの場所ではありません。しかし、子どもの人間力と社会力を育てるために必要不可欠なものです。「いろいろと大変なことがあるけれど、学校へ行くのが楽しい」「いろいろと気を遣うことがあるけれど、みんなで何かするのは楽しい」と子どもたちが実感できるように、調査研究を進めていきたいと思